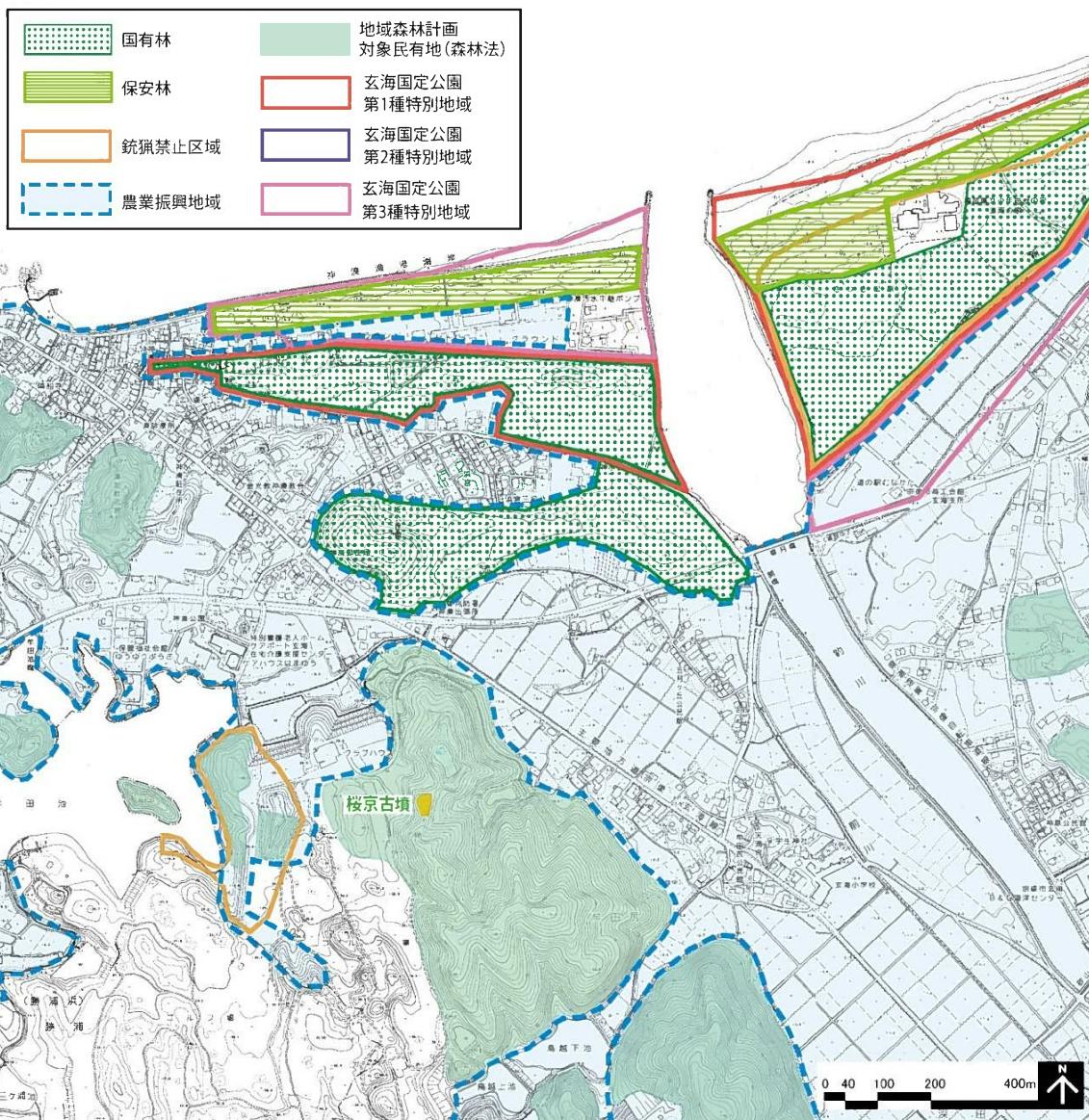


力) 周辺の土地利用

■法令、地域区分

桜京古墳のある牟田尻の西部山塊は、森林法による地域森林計画対象民有林に指定されている。史跡東側の山塊の麓から県道 69 号宗像玄海線までの間は農業振興地域の整備に関する法律により、農業振興地域、農用地区域に指定されている。西側についてはゴルフ場として利用され、森林は緩衝緑地となっている。北側の国道 495 号線沿いは平成 17 年度の第一次宗像市国土利用計画、土地利用構想図で都市的利用ゾーン（商業・工業用地）として構想されている。

凡例



(図 II-2-7 周辺の地区指定など)

■史跡北側の状況

北側の国道 495 号線沿いは平成 17 年度の第一次宗像市国土利用計画、土地利用構想図で都市的利用ゾーン（商業・工業用地）として構想されており、飲食店や乗馬クラブなど、観光客を対象とした施設や福祉施設が並んでいる。前項の景観については、周辺景観への配慮を必要とする東側に比べて、西側及び北側の外景観は柔軟に考えられる状況と捉える事が出来る為、石室施設や展望所などの建設に適している。



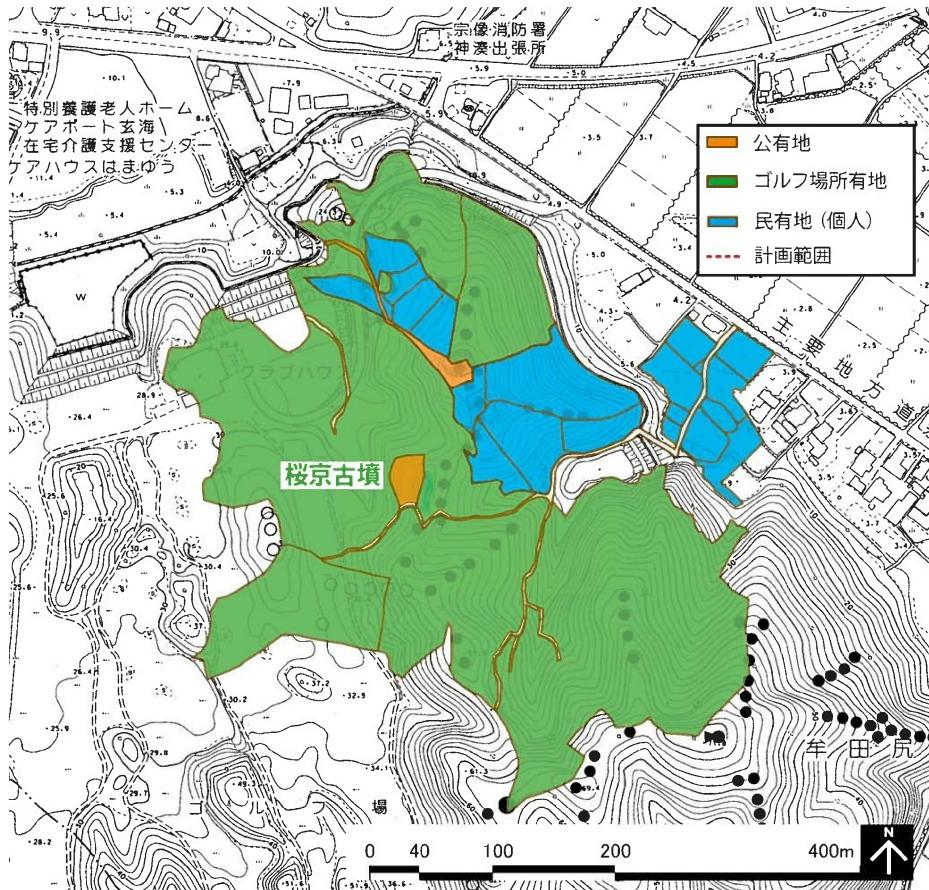
(写真 II - 7 商業利用される北側周辺)

■所有状況と管理

史跡の周囲は隣接するゴルフ場の所有、史跡東側の羅漢池周辺は数名の個人所有地となっているが、森林は荒廃し、羅漢池は多くの蚊を発生させていると思われる。市民活動による森林再生整備、羅漢池の浄化などの企画は、史跡周辺の環境にとっても望ましいものと考えられる。



(写真 II - 8 北側の景観と土地利用)



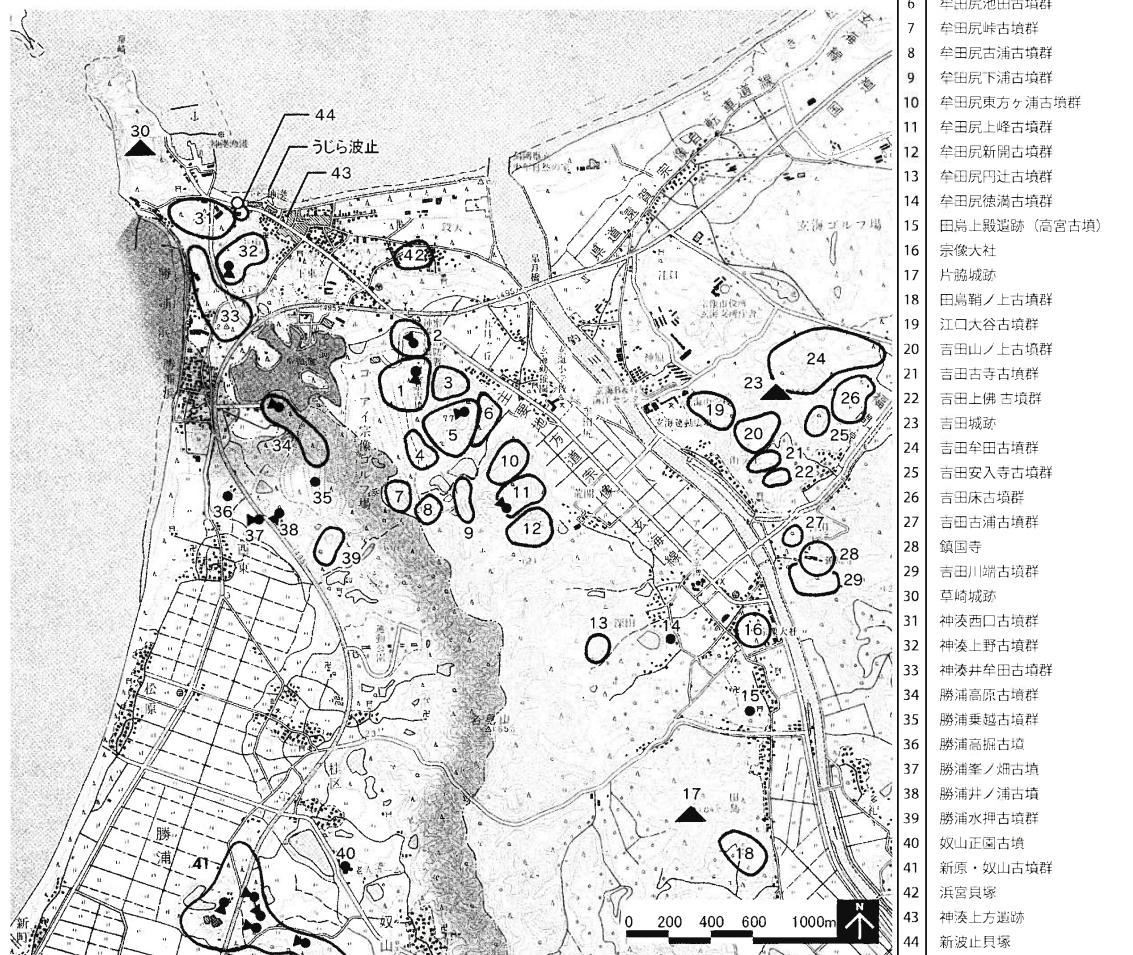
(図 II - 8 周辺の土地所有状況)

3) 周辺遺跡の概要

桜京古墳の周辺には、古墳時代の多様な遺跡が多く確認されており、宗像海人族の活動を知ることが出来る。釣川河口左岸の丘陵上には神湊古墳群や牟田尻古墳群など数百基におよぶ群集墳が展開する一方、丘陵西側の津屋崎古墳群では堂々たる大型前方後円墳が、おおむね北から南へ築造されている。いわば津屋崎古墳群は宗像氏一族の歴代首長の墳墓群であり、神湊古墳群や牟田尻古墳群は宗像氏の支配下にある海人たちの墳墓とも言える。

また、集落遺跡では古墳時代の貝塚では西日本最大級と目される浜宮貝塚をはじめ、古墳時代や奈良時代の製塩遺跡である神湊上方遺跡など、波止形状をなす天然の岩礁「うじら波止」を拠点として活発な海人活動を行う集団の存在が推定される。

まだ、未解明な点が多いが、地方豪族宗像氏による地域支配のあり方を知る上で興味深い様相を示しており、漁撈や戦時には玄界灘を縦横に活動し、沖ノ島祭祀にあたっては厳かに関わる姿が想起される。



(写真 II - 9 うじら波止)

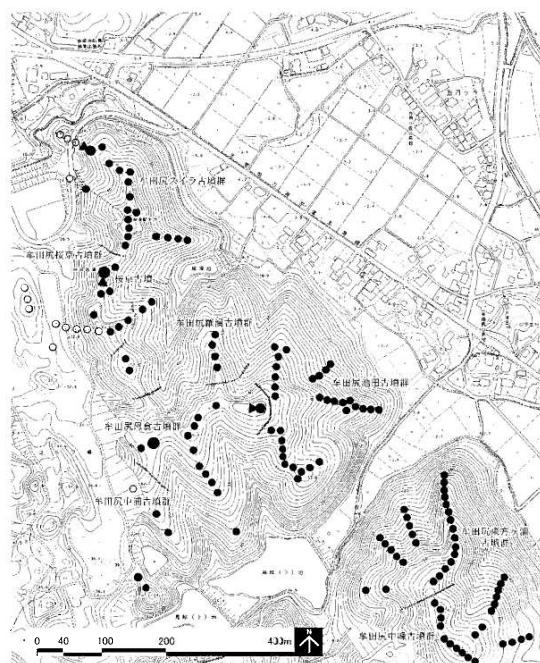
(図 II - 2 - 9 周辺遺跡の分布状況)

ア) 牟田尻古墳群

桜京古墳が属する牟田尻桜京古墳群は、牟田尻の西部山塊の北端の稜線上にあり、桜京から葉脈状に広がる稜線上には、200基余りの古墳が一面に連なり、牟田尻古墳群を形成している。前方後円墳3基を含む、東西0.9km、南北1kmに広がる。数少ない大規模な郡集墳として貴重なものである。

丘陵の西側一帯は平成8年、ゴルフ場の開発に伴い発掘調査が行われ、金銅製飾履や、鉄軸、鉄製アワビオコシ、銅鈴などが出土している。出土品からは、700mほど離れた浜宮貝塚を形成した海人集団との関わりが考えられ、その勢力の強大さうかがえる。

調査された古墳はわずかの部分に過ぎず、今後の調査、研究の成果が期待される。



(図 II-2-10 周辺遺跡の分布状況)

イ) 浜宮貝塚

昭和46年に発掘調査されたこの遺跡は、釣川河口左岸の砂丘上に立地し、遺跡の範囲は、海や遺跡の分布状況から最大で東西200m、南北160mと推定され、玄界灘沿岸で最大の古墳時代の貝塚と目される。標高10mの最も高い位置に浜宮が鎮座し、この浜宮が遺跡の中核部と考えられる。5世紀から7世紀半の土器類や、銛、ヤス、釣針、刀子などの鉄製品、骨鏃やサメの脊椎骨を加工した垂飾、鹿角刀装具片などの骨角器が出土している。自然遺物にはサメ、マダイ等の魚類の他、貝類としてはチョウセンハマグリなど外洋性のものが多く、大型のサザエ、アワビが多くみられることから、潜水漁法の存在が考えられる。また、採集遺物の中には弥生時代のものも含まれ、前身集落の存在も考えられる。



(写真II-10 浜宮貝塚)



(写真II-11 浜宮貝塚)

ウ) 神湊上方遺跡

遺跡は、うじら波止の南の砂丘上に立地する。昭和 56 年に神湊 B 遺跡が発見され、昭和 62 年に同 A 遺跡が発見されている。神湊上方 B 遺跡からは、古墳時代前期の土器とともに倒壊形の製塩土器台脚部が採集された。神湊上方 A 遺跡からは 2 次焼成を受けた 8 世紀頃の玄界灘式製塩土器や焼塩土器の小片が採集されている。うじら波止周辺に分布する遺跡群は、この天然の波止を拠点として 4 世紀以降に成立した、一連の海人集団の遺構と推定され、漁撈の他に土器製塩を行っていたとみられる。



(写真 II-12 製塩土器)

出典：むなかた電子博物館

エ) 新波止貝塚

うじら波止の西、200m の砂丘上に立地するこの貝塚は、昭和 26 年発掘調査された。東西 40m、南北 60m の範囲に分布し、貝類やクロダイ、マダイ等の魚骨、6 世紀から 8 世紀の土師器、須恵器の他、沖ノ島 1 号祭祀遺跡で見られる須恵器有孔壺型土器が出土している点は注目されよう。また、神湊上方遺跡との間の丘陵斜面からも 6 世紀後半の須恵器、土師器、玄界灘式製塩土器が採集されている。

オ) 神湊古墳群

桜京古墳の西に位置する牟田池の北西岸から、占部氏の築城した草崎城址のある草崎半島の南端までの間に群集する古墳群である。小規模な山塊の頂部や尾根線上に 40 基余りの古墳が確認されている。前方後円墳が確認された神湊上野古墳群、神湊西口古墳群、神湊井牟田古墳群、神湊鍋田古墳群の 4 つの古墳群に、立地する山塊によって区分されている。桜京古墳から目視できる距離に位置する。

カ) 津屋崎古墳群・勝浦ゾーン

国史跡津屋崎古墳群も、「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」の構成資産として、世界遺産暫定リストに載る史跡である。5 世紀から 7 世紀にかけて築造された古墳群であり、南北 8 km、東西 2 km の範囲に広がり、現存する古墳の総数は 60 基を数える。

津屋崎古墳群の北端に位置する勝浦高原古墳と、桜京古墳の属する牟田尻古墳群とは、ほぼ接しており築造時期も同じ 6 世紀後半と推定されている。勝浦ゾーンには他に、5 世紀前半から中頃の勝浦峯ノ畠古墳、勝浦井ノ浦古墳が存在する。勝浦峯ノ畠古墳は墳長 100m と大きく、埴輪、葺石を持ち、後円部の横穴式石室内には 2 本の石柱が立つ国内に例のない構造となっている。石室からは鏡や大刀、剣、短甲の他、ガラス玉、装身具など豊富な副葬品が出土している。



(写真 II-13 新原・奴山古墳群)